

【1月の気象】

1月の季語は、「新年」「元旦」など年の初めを表す言葉も多いですが、「雪」「氷」「寒の入り」など、寒さを表す言葉も多くあります。月平均気温の平年値で見ると1月は最も寒くなる月です。テレビで「冬型の気圧配置となり、寒い1日となりました」等、聞かれることが多くなります。

松山で過去の月平均気温を見ると、最も寒かったのは1936年（昭和11年）の2.5℃です。月平均気温の低いほうからの10位まではほとんどが1950年以前となっています。一方、最も暖かかったのは2020年（令和2年）の8.7℃です。気温の高いほうからの10位まではほとんどが1980年以降となっており、近年の地球温暖化の傾向を表しています。ただし、1月の日最高気温の1番高い日は大正時代に観測されており、1916年（大正5年）の24.4℃です。日最高気温の高いほうからの10位までは1940年以前に観測された年が多く、2000年代は9位（2020年）と10位（2010年）の2年しかありません。

今年はエルニーニョの影響もあり、1月の気温は平年より暖くなる可能性が高くなっており、1月の月平均気温の高いほうからのランキングの上位に来るかもしれません。

松山の1月の観測史上1位～3位

単位：℃

	1位	2位	3位
月平均気温の高いほうから	8.7 (2020年)	8.0 (1989年)	7.4 (1972年)
月平均気温の低いほうから	2.5 (1936年)	2.6 (1922年)	2.6 (1918年)
日最高気温の高いほうから	24.4 (1916年)	21.7 (1923年)	21.5 (1916年)

【気象用語】「地上天気図」について

天気図と言っても地上天気図、高層天気図、数値予報天気図等あり、気象庁では目的により様々な天気図を作成しています。

みなさんがテレビ等で良く見られるのは地上天気図と思われます。地図上に等圧線、高気圧、低気圧、台風等が記入してあるものです。これにより、気圧配置や各地の天気等を知ることができます。

気圧には現地気圧と海面気圧があることをご存じでしょうか。現地気圧は、その場所で観測した気圧のことで、海面気圧は、現地で観測した気圧を海面上（標高0メートル）に校正した気圧のことで、一般的に、気圧は標高が高くなるほど低くなります。世界中で気象の観測が行われ様々な場所（標高が高い、低い場所）で気圧の観測をしています。現地気圧で地上天気図を作成すると、標高の高いところが常に低気圧となり、実際の低気圧や高気圧を表すことができません。そのため、地上天気図で等圧線を引く際に使われるのは、海面気圧を使用します。海面気圧を使用することで、標高の違いによる気圧の違いがなくなり、低気圧や高気圧の位置が正確に表すことができます。

天気図について詳しくお知りになりたい方は気象庁ホームページに解説がありますので、こちらも参考にいただければと思います。

気象庁ホームページ「天気図について」

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kurashi/tenkizu.html>

右の天気図は気象庁が所蔵する日本最古の天気図です。気象庁の前身の東京気象台で1883年（明治16年）3月1日に作成されました。この天気図を書いたのは、ドイツから招聘されたクニッピンゲン氏です。

